

## 京図本系統『保元物語』本文考統貂

原水民樹

## 一

京図本系統（根津本系統とも称される）に属する『保元物語』の諸伝本は、犬井善壽氏の精査によつて、根津本系列・史研本系列・京図本系列の三系列に細分・整理されて今日に至る。氏の所説は高い説得性を誇るものの、昭和五十二年に確定されたものであり、その時点より既に四半世紀の時が流れた。その間に、該系統に属する伝本として、あらたに仁和寺蔵本・原水蔵本（上巻のみ）・龍谷大学図書館蔵本・早稲田大学図書館蔵柘型本及び学習院大学蔵実隆筆忠光卿記紙背断簡の存在が報告され、近時、閲覧の機会を得た京都国立博物館蔵天正二十年奥書本もまた同様であることを知った。結局、該系統に属する写本は現時点では断簡を含めて十三本を数えることとなり、それは左のように系列分けされる。

## ○根津本系列

学習院図書館蔵斑山文庫旧蔵慶長十二年奥書本（斑本）・

京都国立博物館蔵天正二十年奥書本（博本）・神宮文庫蔵賢木園文庫旧蔵本（神本）・筑波大学附属図書館蔵根津文庫旧蔵本（根本）・仁和寺蔵本（仁本）・原水蔵本（原本）・蓬左文庫蔵平仮名交本（蓬本）・龍谷大学図書館蔵本（龍本）

## ○史研本系列

京都大学国史研究室蔵本（史本）

## ○京図本系列

学習院図書館蔵慶長十六年奥書本（院本）・京都大学附属図書館蔵本（京本）・早稲田大学図書館蔵柘型本（早本）

## ○いずれの系列にも属さない伝本

学習院大学蔵実隆筆忠光卿記紙背断簡（実本）

【一】内は略称。基本的に犬井氏の命名に従ったが、一部改変、またわたくしに付け加えた】

小稿は、犬井氏の分類・整理された七伝本にその後存在を確認された六伝本を加え、各伝本の関係を再整理しようとする

るものである。結果として、犬井氏の成果に依拠・立脚しつつ、それにいくほどの知見を加えるものとなる。

京図本系統内部を三系列に細分することについては、断簡である実本の扱いを除いて稿者に異論はない。従って、小稿でも犬井氏の三系列分類を前提として考察を進めることとする。ただし、蓬本（神本・原本）と仁本は、前半部が金刀本系統、後半部が京図本系統の本文を持つ、取り合わせ本であり、蓬本では上冊第四五丁表第一行「卯刻に高松殿より東三条の御所へ行幸なる」以降の本文（神本・原本は蓬本からの転写本なので同様）が、仁本では、上冊第五四丁表「仙洞に八大臣殿為義をめぐりてかつせんのかやうなるへきそとおほせられけれハ」以降の本文が小稿における検討の対象となる。

## 樹 民 水 原

本文引用に際しては、その都度、所拠伝本を明示するが、参考として本文末（ ）内に和泉書院本における所載頁を示す。また、半井本・鎌倉本・金刀本については、各々、新古典大系本・三弥井書店本・旧古典大系本を用い、同じく本文末（ ）内に所載頁を記入する。

## 二

三系列の中、まず根津本系列に属する諸伝本の相互関係を検討する。該系列に属する六部の写本（実際は、八部存在するが、神本と原本は蓬本からの転写本なので、煩瑣を避けて

言及しない）を通観すると、その中で、根・龍・博・仁の四伝本が一つのまとまりをなしていることに気付く。そのことを証する主要な事例を以下に掲げる。

(1) ためよしみかたにさんこうつかまつり候しハかつせんにをいてハちうをいたすへく候(35)

(傍線稿者、以下も同)

(略校異) さんこう — まいり (仁本)、候し — 候上 (他本)

(2) ころにつきてひきまふけたれはひやうとはなつ(41)

(略校異) ころ — 期(史本)、れ — る矢なれ(京図本系列)

(3) たれかせんにあひたてまつるこりたまハぬかといへは (48)

(略校異) せん — せんと (斑本を除く根津本系列・史本)、る — り候 (根本)

(4) なんちかおと、とものおさなきかあるなるミなおのこ、にてあるなれはのこしおきてハあしかるへし(78)

(略校異) とも — 共に (龍本・博本・仁本) の (京図本系列)、おさなきか — おさなきもの (京図本系列) ・ おさあひもの共か (龍本・博本・仁本) ・ おさなき (蓬本)、おきてハ — をかハ (龍本・博本・仁本) ・ おきて (史本)

(5) ひころのミゆきにハくきやうてんしやう人こそ御くる

まそへにハマいりたまひしにあやしけなるもの共御くる  
まそへにまいりければ(91)

(略校異) こそ — ナシ (京図本系列・博本・仁本)、

傍線部 — 行間書き入れ (蓬本)、けれ —

たれ (根本・龍本・博本・仁本)

(6) これハおそろしきつわものなれはいのちをいけん事い  
か、あるへききるへきものかとせんきありけるか(102)

(略校異) おそろ — かな(史本)、いか、 — いかに

(史本)、ものか — ものかなか(根本)・か(蓬

本・博本・仁本)

便宜上、斑本の本文を示した。伝本間で表記の相違や小字句の異同が見られるが、論旨に係わらないため、比較的目的に立つ異同のみを略校異として付記した。

さて、(1) — (6) の各々においては、該系統諸伝本中、

根・龍・博・仁の四本のみが傍線相当部を有していない。傍線部を持つ形とそうでない形のいずれが系統本来の姿であるか俄には決しがたい。ただ、(6)については、傍線部記述がなくて文意が通じないから、これを持たない当該四本の形は欠脱を生じた結果と判断される。恐らくは、「つわもの」の「もの」から「きるへきものか」の「もの」への目移りによって生じた欠脱だろう。(5)の場合も、傍線部を持たない四伝本の形は「まいり」の目移りに起因する欠脱の結果とみてよいだろう。(2) (3) (4)については、傍線部相当語句もしくはそれに近い文詞が他系統である半井本・鎌倉本・金刀本

のすべて或いは一部に見られること(5) (6)についても同様)から、有する形をやはり本来とみなしてよいのではないか。残る(1)については判断に苦しむが、概して、傍線相当部を持たない当該四伝本の姿は、京図本系統本来のものではなく、転写の過程で生じた欠脱或いは省略の結果と推定される場合が多いといえる。

(7) 御幸を東国へなし参せてあしからはこねをきりふさき  
東国の住人とうをもよおしてなとかしはらくさ、へて候  
へき(35)

(略校異) 参せて — ままいらせて(史本)、もよおし

て — 催候て(根本・龍本・蓬本・史本)、

さ、へて — さらへで(龍本)

博本の本文を示したが、根・龍・仁三本共に博本に同じ。しかし、他の系統内伝本はすべて傍線部を「南都」とする。戦の手だてを頼長に問われた為義の返答の一部であり、後続の「あしからはこねをきりふさき」との照応を考慮すれば、文脈としては「東国」が是と知られる。他系統である半井本・鎌倉本・金刀本などの場合、為義の進言は、南都への退却、叶わぬ時は東国への退却と展開している。これが物語本来の姿で、南都への退却に触れず一気に東国への退去を為義が口にする京図本系統の形は他系統の如き本文を抄出した結果生じたものと思われる。ただ、その抄出法が「南都」へ逃れて「あしからはこねをきりふさ」という不手際なものだったため、

後の段階で「南都」を「東国」に改めることでその不手際を解消したと思われる。従って、京図本系統本来の姿は「南都」であり、それを「東国」と改正した根本以下当該四本の姿は京図本系統中では後出と推測される。

(8) さるほとに新院ハはるかにのひさせ給ふ(52)

(略校異) ハーナシ(京図本系列)、給ふー給ぬ

(龍・博・仁本以外)

根・龍・仁三本は右掲の博本に同じだが、それ以外の系統内伝本すべて傍線部相当語を持たない。「さるほとに」を持つ形、持たない形のいずれが系統本来の姿であるかは分からない。

以上、根津本系列六(八)伝本の中では、根・龍・博・仁四伝本の近接する事実が明らかになったと思う。

さて、この相近接する四伝本をさらに詳細に見ると、その中においては、龍・博・仁三本がより一層近い関係にあり、根本はそれらから少々隔たっていることが知られる。以下、前に倣ってその証となる事例を示す。

(1) 臆は落させ給ひけり成すみくつれ落てか、へ奉る(52)

(略校異) 臆はーやかて(他本)、ひーひて(斑本)、

すみー高(京図本系列)、くつーこほ(斑本)

(2) いっしかはや心かハリしてんけるよ情なきもの共のありさまかなとて御涙をなかせ給ひけり(55)

(略校異) 心ー御心(龍本・博本・仁本・斑本・蓬本)、

るよーり(斑本)・るよと(京図本系列)、

涙をーなミた(博本・仁本)、させーし

(博本・仁本)、ひけりーふ(斑本)

(3) た、とくく下らせ給へとそ申ける入道のたまひける

ハいさとよわかくさかんなりし時たにも陸奥守にもなきれす(68)

(略校異) いさーしらす(史本)、んなりーへ(京

図本系列)

(4) 我等ハ所領の一所もなきやうにてこつしきつたなき様をして(81)

(略校異) のーナシ(根・斑本以外)、なき様ーの

きやう(他本)、様ーさま(史本・斑本)

(5) 懐よりくろくとしたるかミのち付たるをとり出して奉る(略) 此程しやうじけつさいして八幡へ参りつるハ

たれためそや(86)

(略校異) 懐よりーナシ(史本)、のーに(史本)、ち

ーちの(根・蓬本以外)、をーナシ(博本・

仁本)、てーナシ(龍本・博本・仁本)、れー

れか(龍本・博本・仁本)・か(他本)

便宜上、根本の本文を示した。その各々において、該系統諸伝本中、龍・博・仁三本のみが傍線相当部を持たない。(1)

(3) (4) については、傍線相当部が半井本や金刀本にも見いだされることより、存在する形が本来と推定され、龍本以下当該三本の姿は、省略或いは欠脱の結果と考えられる。特

に(3)は文脈上からも欠脱と判断されるし、(5)の「しやうじけつきいして」も、その直前の語「此程」との係わりを考えれば、必要な句である。よって、これを持たない形を欠脱と見なすべきだろう。(2)及び(5)の「くろく」としたるかみの」については、傍線相当部を持つ形、持たない形のいずれが系統本来の姿であるかは定めがたい。

次に、(1)と(5)とは逆、すなわち、系統内諸本中、龍・博・仁三本にのみ特有の字句が見いだされる事例を示す。

(6) 入道殿にゆめはかりしらせたてまつらて(74)

(7) きめいわたくしなしとてこしをか、せて六条堀川のしゆくしよへゆきむかひて(79)

(略校異) をーナシ(史本)

(8) くひをのへてそきられたまふしよ人なミたをなかし袖をしほらぬハなかりけり(84)

(略校異) のへてそーさしあけ(斑本)、れたまふー

れける(史本・蓬本)・せける(根本・京図本系列)・せたり(斑本)

(9) は、うへハた、あきれて是は夢かやいかなる事そや(86)

(略校異) ハーナシ(龍・博・仁本以外)

博本の本文を示したが、龍・仁本も同文。右の(6)と(9)については、系統内諸本中、龍・博・仁三本にのみ傍線相当部が存在する。いずれについても当該部の有無が文脈理解に大きな影響を及ぼすことはない。他系統に相当語句が存在し

ない事実を考えれば、これらを龍・博・仁三本の段階における増補と判断してよいだろうか。

次いで、系統中、龍・博・仁三本の間でのみ本文の合致が認められる事例を示す。引用は博本の本文である。

(10) それかしよろいの袖にうらかいて候そや(38)

傍線部、龍・仁本も「それかし(か)」と博本に同じだが、系統内の他本は、「伊東(伊藤)ー京図本系列、いとー斑本(五か)」(根本に拠り、伝本間の略異同を( )内に補記した。以下、所拠本を明記せず他本として本文を引く場合は、同方法を用いる)とする。伊藤六の体を貫通した為朝の矢が勢い余って後統の伊藤五の鎧袖をも射抜いたことを、父の伊藤景綱が清盛に報告する場面である。文脈としては、他本の如く「伊東五か」とあるべきで、龍・博・仁三本の記す「それかし(か)」では、為朝の矢が伊藤五ではなく伊藤景綱の鎧袖を射抜いたこととなり、前後矛盾する。当該三本の明らかな誤りである。(11) 諸寺諸社へおほせいたされて調伏すへきよしを御宝幣なさるしかれとも(57)

龍・仁本は博本と同じ。文中の「宝幣」は奉幣とあるべきだろうが、それにしても本文としてはよくない。系統内の他本を見ると、根・斑・史本は「しよ寺しよしやへてふふくすへきよしおほせられしかとも」(斑本による。根本は一部欠脱)、その他は「諸寺諸社へ仰られて調伏すへき由を仰られしか(京図本系列)ーのたまひしか(

とも」(蓬本による)と各々異なる。他系統では、半井本「諸寺諸社ニテ是ヲ調伏セシカ共」(76)、金刀本「諸山に仰せて調伏せらるゝといへども」(125)とある。

(12) このきいはれたりとてミなくしぎいにそおこなハれる(72)

龍・仁本は博本と同じ。系統内の他本は傍線部「みなめされてきられに」(史・斑本ナシ)けり」とする。他系統では、半井本に「皆被レ切ニケリ」(97)と、他本に近い本文が見える。

(13) 尋出てうしなへとのせんしなれハちからおよハす(78)

龍・仁本は博本と同じ。系統内の他本は「尋出てきレ(かうへをはねよ——史本)と仰られけれハ」と異なる。敵対した弟達を追討せよとの勅命が義朝に下ったことを記す一節なので、当該三本のみが持つ「ちからおよハす」は、物語の記す状況から必要とはいえない。他系統では、半井本に「次第二擲テ進セヨ」ト被レ仰」(104)と見え、鎌倉本(58)も半井本に近い。

(14) 宿所にあらんするをハ船岡山へつれてゆけ(79)

龍・仁本は博本と同じ。系統内の他本は傍線部「なかせぬやうにこしらへて船岡山へ行ケ」とする。いずれの形でも文章上の不都合はない。他系統では、半井本に「スカシテ、道ノ程泣セテ、船岡山ニテ切レ」(105)〔金刀本(150)もほぼ同〕と他本に近い形が見える。

(15) おさあひもの共見てなきさハきかはあしかりなん(82)

龍・仁本は博本と同じ。系統内の他本は傍線部「事のわつらひにもなる(りぬ——根・蓬本以外)へければ」と異なる。なお、他系統は文詞が異なる。

(16) かゝるうきめを見る事よ(身にもさしてとかともおほえぬに)かうの殿よりこめられ参らせつねハおひこめられし時ハ(84)

龍・仁本は博本と同じ(ただし、仁本では「より」が「とり」)。系統内の他本は各傍線部「見んするかはしめ(ミんするため——京図本系列・蓬本、見まいらせ候へきはしめ——史本)にて有けるか(そ——京図本系列)や」、「はなをつき」と異なる。さらに、京図本系列は(一)内相当語句を持たない。他系統はこのあたり大異。

(17) いかなるてんまのしわさにておほくの人のさはきとそ申合ける(94)

龍・仁本は博本と同じ。系統内の他本は、傍線部「きもをつぶす(つふさす——京図本系列、けす——斑本)らむ」とし、本文としてはこの方がよいか。他系統の場合、半井本に「人ノ肝ヲツブシケルコソ不便ナレ」(122)〔金刀本(164)もほぼ同〕と、他本に近い本文が見える。

(10) (17) は、系統中、三本の間にのみ表現・記述の一致が見出される事例である。各項に於いていささかの検討を加えた如く、すべての場合について、当該三本の本文と一致或いは近似する本文を他系統中に見出すことはできない。また、三本に特有の記述の中には文章として妥当でないものも

見られた。このことより、(10)と(17)におけるこれら特有記述の多くは当該三本における改変現象と判断してよいように思われる。

以上の考察より、根・龍・博・仁四本の内部では、さらに龍・博・仁三本が一つのまとまりをなし、根本がひとり離れていることが了解されたと思う。

そして、さらに述べるなら、これら一まとまりをなすと見られる龍・博・仁三本中では仁・博本がなお一層緊密な関係にあることが知られる。以下、この点を検証する。

(1) 射落さん事ハやすき事なれ共それも餘に無念也(48)

(略校異) き事な―け(史本・斑本)、も―ハ(根・

龍本以外)、餘に―あまりにく(京図本

系列)、也―におほゆるそ(京図本系列・

史本・龍本・蓬本)・におほへ候そ(斑本)

(2) 金子十郎ハ高名しきはめて既うたるへかりしがかたき

におしまれて命をたすかりける(49)

(略校異) 名―間かうかう(仁本)・間高名(博本)、し

き―き(斑本)、たる―たれたる(京図本

系列)、が―ナシ(蓬本)、を―ナシ(龍

本)

(3) くんこうのしやうにおいてハ子々孫々に及へしと仰ら

れけれハ彼等庭上に跪て仰を承て出ぬ(59)

(略校異) 子々孫々に及―望による(史本)・子孫に

をよふ(他本)、ら―出さ(龍本)・下さ

(史本)、彼等―ナシ(史本)、を―ナシ・

(根・斑・蓬本以外)、出ぬ―けり(史本)

(4) かうくと申たらハ思召事あらハ仰られんつらむ(74)

(略校異) たらハ―候ハ、(史本)・たらんに(斑

本)、れ―れ候ハん(斑本)

(5) 事とふ物とてハ松吹風なきさのちとりきしうつなみの

こゑはかり(97)

(略校異) 事―ナシ(史本)、なきさ―ミきは(京

図本系列・史本・斑本)、はかり―はかり

也(京図本系列・史本・斑本・蓬本)

(6) たまくりよしうの白日にともなつて悲涕の愁をけす

いかてか舊郷に帰て再ヒ世きをなさん(99)

(略校異) け―遣(蓬本)、白日に……いかて

か舊―ナシ(斑本)、再ヒ世きをなさん―

諸本区々

(7) 御はか三度までゆるきけるこそおそろしけれさてもこ

としハくれぬ長寛も二年に成にける(100)

(略校異) おそろしけれ―ふしぎなれ(龍本)・おそ

ろしき(斑本)、ぬ―ぬれハ(他本)、成

に―行間書き入れ(京本)

便宜上、根本に拠つたが、系統内諸本ほぼ同様。しかし、中で博・仁二本のみは傍線相当部を持たない。各々について簡単な検討を加えるならば、(3)の場合、傍線相当部がない形は、恐らくは「仰」の目移りに因る欠脱の結果生じたと思

われるし、(4)(5)(7)についても、傍線部相当語句がない場合、文脈に何らかの支障が生じることより、やはりこれらを持たない博・仁二本の姿は欠脱を生じたものと解される。(6)については、傍線相当部が金刀本にも見いだされることを重視すれば、これも二本における欠脱の故の現象かと推測される。残りの(1)(2)については、傍線相当部をもたない形が系統本来の姿か、欠脱或いは省略の結果であるか見定めがたいが、存在する場合の方が文脈がなだらかであり、また、(2)については、文詞の相違はあるが、半井本(67)や金刀本(115)にも傍線部と同趣の記述が見られる。よって、(1)(2)における博・仁本の現象についても、これらをあえて京図本系統の本来性を残したものと見る必要はないだろう。(8)下野守馬の三事かうかふとの着やうあつはれ大將軍やとそ見えたる(45)

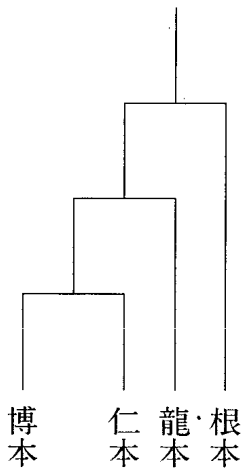
博本の本文を示したが、仁本も同文。傍線部「馬の三事かう」「三事には「さんし」(斑本・仁本——さんじ)の(仮名を振る)」は意味不明の字句だが、他本には「馬の上(上の——京本、うへの——院本・早本)ことから(事から——斑本・蓬本、ことがら——龍本・院本・早本)」とある。この事実より、博・仁本の「馬の三事かう」は、「上」を「三」に、「事から」を「事かう」と読み誤ったことに由来すると推測される。

(9)さうのよろいの袖をふまへたるあひた高間ハちともおとろかす(49)

博本の本文を示したが、仁本も同様。傍線部「おとろかす」は文脈上よくない。相当部、他本では「はたらかす(ず)」とあり、妥当といえる。従って、博・仁本の姿は、誤写の結果生じたものと推測される。

博・仁二本のみに共通する欠脱・省略や誤りが見られる事実を指摘した。このことより、二本の近似性が確認できたと思う。

以上、根津本系列六(八)伝本中では、まず、根・龍・博・仁四伝本が一つのまとまりをなしており、その四伝本の中では龍・博・仁三伝本がより一層の近似を見せ、さらに三伝本中では博・仁本がより近い関係にあることを確認した。こうした段階的な類似は、根・龍・博・仁四伝本の分岐の各々の階梯を示唆するものと考えられ、四本の相互関係は、その親疎の度合いから以下のように帰結される。当該四伝本の中ではまず最初に、根本(の祖本)と龍・博・仁三本の共通祖本の分岐が生じ、次いで、龍本(の祖本)と仁・博本の共通祖本が分岐し、最も降って、仁本(の祖本)と博本(の祖本)が分かれた。よって、系統図の雛形を示せばおよそ次のようになろう。





右掲図は、現存四伝本の関係の大枠を示したものに過ぎず、例えば、仁本と博本が実際に兄弟関係にあると主張するものではない。

以下、各段階における分岐の実状について考えたい。まず、根・龍・博・仁四本の共通祖本の成立については、前に八項目の事例を掲げて検討した如く、本文は正あるいは本文付加の意図もいくほど見られるものの、その本質は所拠本書写時における本文省略及び不注意による欠脱にあると言える。従って、該共通祖本の形成は意図的というよりは、むしろ杜撰な書写によってもたらされた結果的現象としての色合いが濃い。

次いで、根本（の祖本）と龍・博・仁三本の共通祖本との分岐に関して述べると、前に掲げた十七項目の事例の検討結果よりして、三本の共通祖本の形成にはかなり明確な意思が働いたと推定される。不注意に起因すると思われる欠脱も存在するが、その一方で、小規模ながらも明らかな増補作用が認められ、意図的な本文改変の事実も存在する。龍・博・仁三本の共通祖本は、所拠本の忠実な書写に終始せず、小規模ながら省略・増補・本文改変の意図を明確に持った伝本だったと言えるだろう。そうした本文へのこだわりは敬語使用にも反映している。『保元物語』の場合、皇族及び上級貴族に対しては一貫して尊敬語が用いられるが、一般公家や武士に対しては統一性がない。為義や義朝といった武将を例にとると、対郎等の場面では彼等の言行に敬語が用いられるが、対貴族

の場面では使用されないといった相対性が見られる（この現象は『保元物語』に限らない）。そうした傾向の中で、当該三本の場合は、敬語の使用頻度が高く、かつ、より状況に即した用い方がなされている。具体例を示すと、為朝の対義朝の言の場合、他本には一貫性がないが、三本には、謙讓表現で統一しようとする方向性が見出される。こうした姿勢は他の人物の場合にも認められ、このことより三本においては長幼・主従関係等を考慮した敬語表現に改めている事が分かる。また、金子家忠の勝名乗り「さすかに一人してよき敵二人うつ事は承も及す」（49）の「承も及す」を「聞（き、）もおよハす」と、謙讓表現を除くことにより、金子の不敵さをより強く打ち出そうとするなど、当該三本の場合、敬語使用に細やかな配慮を施していることが分かる。もともと、それも他本に比して配慮の度合いが濃いつつ程度であって、徹底したものとはなっていないことも事実である。

以上述べた如く、当該三本の共通祖本は、その形成に際して所拠本の本文を忠実に書写することのみを旨とするものでなかった。達成度に対する今日的評価はともかく、自覚的な分岐であったとは言える。

最後に、龍本（の祖本）と博・仁二本の共通祖本の分岐について述べる。博・仁二本に共通する特徴は、前述の如く相当数にのぼる欠脱にある。このことより、博・仁本の共通祖本の龍本（の祖本）からの分岐は、かなり杜撰な本文書写の結果としてもたらされたものであり、そこに自覚的な意志作

用を認めることは出来ない。

要するに、三段階に亘る分岐の中、一度目は比較的物理的な要因で生じたものだが、二度目はかなり自覚的な本文改変といえる。そして三度目は杜撰な書写に起因する度合いが最も濃い非意図的なものであったと見る事ができよう。

### 三

根津本系列諸本の中、根・龍・博・仁四本の関係についての整理を終えた。次に、該系列に属する残りの伝本である斑本と蓬本について述べる。まず、斑本だが、該本を犬井氏は以下の如く把握される。一丁分にわたる落丁がなければ、「かなり重視しなければならぬ」が、「非常に多くの不注意から来た脱文」と共に、「小さな補改が試みられた本文を有」<sup>5)</sup>する伝本である、と。氏の見解に稿者も異論を挟むものではないが、系列内における該本の位置をもう少し明確にしたい。稿初に述べたように、斑本は根津本系列に属する一伝本と認識されている。このこと自体は誤りないと思うが、細部に目を遣った場合、同系列である根津本系列から離れ、京図本系列の方に一致する本文を有する現象が往々認められる。以下、そうした事例を示す。

(1) 神むてんわうハ天下をたもつ七十六ねん御しゆミやう  
 一百廿七さいなりその、ちのていわうもあるひハ百十四  
 年あるひハ一百よねんなんとなりむかしこくわうの御し

ゆミやうもかくこそひさせ給ひける二(3)

(略校異) 天下をたもつ — 治天(京図本系列)・天下を治(根本)・治天下(龍本・史本)・天下おさめ(博本)、七さい — 余年(龍本・博本)・余年と(根本)、よ — 廿余(他本)、かし — かしハ(他本)、ニ — 一カ(根本)

(2) しんせいせんしをうけてよしともハあかちのにしきのひた、れに(略)ていしやうにひさまつきてそ候けるしんせいおほせをうけたまハリていわく(30)

(略校異) うけ — うけ給(京図本系列)・奉(史本)、る — るに(京図本系列)、うけたまハリ — 奉(史本)

(3) けんけん御まくらにまいりてあまり御心よわけにおほしめして候ものかなけんけんかまいりて候をはしろしめされ候やらん(62)

(略校異) あまり — 餘に(史本)、おほしめして候 — 見えさせ給(史本)、れ — れて(京図本系列)、候や — 候ハぬ(根本・博本・仁本)

掲出したのは斑本の本文。この各々について、根津本系列内の他伝本すなわち根本・龍本・博本・仁本・蓬本には傍線相当部が存在しない。即ち、系列内に限れば、傍線部は斑本固有の記述と言えり。しかしながら、視野を系統全体に広げた場合、他系列である京図本系列並びに史本に、斑本と同趣の記述が見出される。

(1)の場合、傍線相当部がなくても文脈に特別の支障はない。しかし、「むかしこくわうの御しゆミやうもかくこそひさせ給ひける」と、古代帝王の長命なることを説く後続文の存在を考えれば、長寿が神武のみに限らないことを記す旨の当該文のある方が本文としてはよい。また、金刀本系統にも傍線部との同趣文が存在することより、傍線相当部を持つ斑本及び京図本系列・史本の姿が系統本来かと推される。(2)については、傍線部が後続文「よしともハ……」に直結していない事実、及び、後に同趣句(傍点部)が再出する事実より考えて、傍線部、衍文と見るべきではないか。この場合は、(1)とは逆に、相当句を持たない他本の形が本文としてよい。(3)の場合、傍線相当部をもたない他本の形は、恐らくは「けんけん」の目移りによる欠脱の結果生じたものであって、相当句を持つ斑本及び史本・京図本系列の形が本来と判ぜられる。

(4) あきのはんくわんもとより(13~16)

斑本の本文を示す。以下(11)まで同様。「もとより」を京図本系列は「基盛」、他は「宗盛」「むねもり」(史本は「宗院」とも誤記)とする。斑本の記す「もとより」(他部では「もとよし」とも)は、勿論誤りだが、それが「宗盛」からではなく、京図本系列の記す「基盛(もともしり)」から生じたであろうことは間違いない。なお、物語本来の形は「基盛」であり、「宗盛」は後の改変と考えられる。

(5) まして此しよまふにおきてハへつのしさい候へからす

(20)

斑本・史本・京図本系列(候―有)はほぼ同文。他本は傍線部「御心安かるへし(く候―博本)」。本文としてはいずれでもよいが、他系統を見ると、鎌倉本には「安き事には非や」(29)、金刀本には「無下にたやすき事にあらずや」(77)と、他本に近い形が見える。

(6) 御くるまをとめてまつりてたつね申に(60)

斑本・史本(申に―申ければ)・京図本系列ほぼ同文。他本は、傍線部「内裏へつけ申けれハいつくへ此由を(蓬本は行間に「の由をイ」と記す)尋申て(そ―龍・博・仁・蓬本)」とする。文章としては斑本等がよく、他本の場合文章に混乱がある。半井本には「止進テ、内裏へ此由申ケレバ、「何へ渡セ給ゾ」トテ尋奉レ」ト被レ仰ケレバ」(90)と見え、これを考慮すれば、他本の形は、半井本の如き姿がくずれたものかとも思える。

(7) けんさいのおやのむかひてゆミをひくこれひとへにちよくめいのかたしけなきをまもる成しかるにさきたちてせうてんゆるされぬ(61)

斑本・史本(まもる成―をもんする故也)・京図本系列はほぼ同文。他本は「勅命そむきかたしといへ共現在の父にむかひて弓を引ものや候へき然に院宣に昇殿ゆるされぬ」と異なる。いずれの場合も文章として問題は無い(ただし、他本の記す「院宣」は誤りで「宣旨」とあるべ

きところ)。半井本には「勅命背キ難ト云へ共、父ニ向テ弓ヲ引、矢ヲ放テバ」(82)と、他本に近い形が見える。

(8) あなむさんやなさりともしはしハあらんすらんとおもひてこそ見さりつるに(63)

右の斑本の本文は京図本系列とほぼ同文。根津本系列内の他本では、「むさんやな」の下に「事きれけんこさんなれ」との一文が入るが、当該句を持つ形、持たない形のいずれが系統本来の姿であるかは分からない。史本は相当部「あなむさんやしはしよめいもたすかりなんやと思てこそ対面なかりつるに」と異なるものの、「事きれけんこさんなれ」に相当する句を持たない点は斑本・京図本系列に同じといえる。

(9) あんないをもふれすしてそうなくみたれ入のてうふしきなりはうにまかせてついしゆつせよとい、ければくわんくんこらへすしてひきしりそく(65)

斑本・史本(ついしゆつ—追出)・京図本系列(ついしゆつ—おい出)はほぼ同文。他本には、傍線部「とて防けれハ(蓬本のみあり)清盛か郎等共うちしらまかされて」とある。蓬本が最も意味がよく通じ、他の場合、本文に不足があるか。

(10) 五い以上の物かうきにあてらるゝ事せんれいたつねられけるに(66)

斑本・史本(たつねられける—を尋る)・京図本系列はほぼ同文。他本は、傍線部「先例也されハ例を尋られ

けるに」とする。他本の形の場合、根本が「也」の右脇に「なし歟」と記し、かつ「元本なしトアリシヲ後人なりと誤テ真書ニ書誤シニヤ」と朱注して、「なし」から「也」への誤記を推測していることから明らかなく、本文としてよくない。公家が拷問されること珍しきをいうのが趣意だから、斑本のごとき形が妥当であり、かつ本来の姿であることは、半井本「五位已上ノ者ノ拷器ニ被レ寄事、先例希也。サレ共」(89)、金刀本「五位以上の者、拷訊によせらるゝ事、先例まれなり。」(133)を参照するまでもない。

(11) 御ふねにめさせまいらせてやかたにとりしやうをさしてけり(92)

斑本・京図本系列(とう—外よ)はほぼ同文。他本は、傍線部「御舟の(蓬本のみあり)やかたの内へおし入奉て」(根本・蓬本)、「御舟にめさせ(せ参らせて—史本)やかたのうちへおし入奉りて」(博本による。史・龍・仁本同じ)とある。史本等が最も懇切だが、他の形に欠陥があるということでもない。

以上、大局としては根津本系列に属する斑本の本文中に、別系列である京図本系列や史本に一致或いは近似する文詞が見出されることを指摘した。この事實は、斑本が根津本系列の伝本の中では、京図本系列よりの本文を有していることを物語る。それでは、この現象をいかに認識すべきか。蓋然性として次の二つの場合が考えられよう。一つは、斑本がその

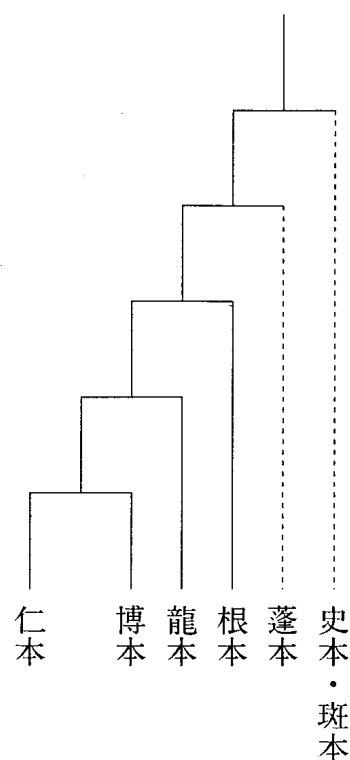
形成に際して根津本系列の特徴を備える伝本に多く依りながらも、京図本系列に属する伝本をも部分的に参照・利用したとする考え方、いま一つは、根津本系列が分岐して以降、根本によって代表される本文の特徴を備えるに至る前段階の姿を斑本が伝えているとする考え方である。前に掲げた十一の事例が、この把握のいずれを支持するかは即断できない。斑本が系統本来の姿を伝えていられることを示すかと思われる現象は確かに存在するが、そのことが後者の認識をそのまま保証することにはなるまい。ただ、系列中の最善本と目される根津本にも少なからぬ不純性が見出されることより、現存諸本は系列祖本からかなり隔たった形を伝えていると言えようから、斑本に部分的な古態が見られたとしても、とりたてて奇異とすべきではない。稿者としては、斑本（の祖本）の分岐は、根・龍・博・仁四伝本の共通祖本形成に先立つ時点で生じたものと見なしたい。

次いで、蓬本について一言する。追検証は行わないが、該本の場合、扱いに慎重さが求められる相当数の行間書き入れを持つものの、根本とは「近い段階で同一本にさかのぼり得る」伝本であるとの犬井氏の認識が首肯される。現存本中、根本に最も近い位置にあるのは龍・博・仁の三本だから、該本は根本との近似度においてそれらに次ぐ位置にある。そうした事実を目安にすれば、該本（の祖本）が、根本に至る流れから分岐した時点は、根・龍・博・仁四本の共通祖本形成以前であり、かつ、斑本（の祖本）の分岐以降となろう。

## 五

ここでは、一本を以て一系列を立てられている史本について述べる。該本は、犬井氏の初期の系列分類においては根津本系列（当初の名称はA系列）中に収められていたが、後に「乱に敗れた院方の人々にまつわる記事に於て意改・加筆を施した一本の流れをくむ<sup>7</sup>」ものとして、あらたに一本のみを以て史研本系列として独立させられた。当初、根津本系列に所属させられていたことから明らかのように、該本は根津本系列に属する伝本をもととしてそれに意改・加筆を施したもので、根幹をなすのは根津本系列の本文である。前に、斑本が京図本系列に一致・類似する証として掲げた十一例中、実に九例までが史本にも当てはまることより、固有の意改・加筆と思われる箇所を取り除いた後の史本は諸本中最も斑本に近い姿を有するものとなる。ただし、史本・斑本両者の関係については、現存本を幾段階か遡る時点で、二本のみの共通祖本を想定し得るかとなるとその点判然としない。史本・斑本のみ共通する字句は確かに存在するが、当該二本の間に緊密な関係を想定するには、これら現象は余りにも些細かつ少数に過ぎない。今後の検討に待ちたい。

さて、以上の考証の結果を総合するなら、これまで以上に言及した諸本の関係は蓋然的に次のように捉えることができよう。



右は、比較的顕著な本文現象を目安にして諸本関係を図示したものに過ぎない。微細な字句に至るまでの異同のすべてが右に示す伝本関係を支持しているわけではない。細部に注目する時、あらゆる伝本間に相互の一致・類似現象が見いだせ、そこに明確な一つの法則性を見出すことができないといふのが実状である。それら微細な一致・類似の中には場合も少なくないと思われるが、一方では系統（系列）を超えての度重なる相互影響の結果生じたものもあると臆測される。そうした意味で、右は、比較的顕著な本文異同を手懸かりとした物言いに過ぎない。

## 六

本節では、京図本系列に属する三伝本、すなわち、学習院図書館蔵慶長十六年奥書本（院本）・京都大学附属図書館蔵本（京本）・早稲田大学図書館蔵柘型本（早本）の関係について整理したい。まず、京本と院本の関係だが、この点は既に犬

井論に尽くされており、院本が「京本よりも後出の本文である」との氏の判定は今後とも覆る余地はないだろう。院本には京本に比して四箇所にわたる顕著な欠脱が認められるほか、小規模な誤脱が見えるが、その逆の事例、すなわち、院本の本文が京本のそれより優れている事例が見あたらないことがそれを証する。もっとも、ごく微細な点に限れば、例えば、

① 弟のの景親（京本）——おと、の景親（院本）（47）

② あしけなる馬くろくろをきてそ（京本）——あしけなる馬にくろくろをきてそ（院本）（48）

③ 前公のほほたいをも（京本）——前公のほほたいをも（院本）（90）

など、院本の本文の方が良い場合もいくつか見られるものの、それらは一見して京本の誤りが明らかなものばかりで（①③）は、行変えに起因する重字である）、こうした現象を以て院本を京本の上流に位置させることはできない<sup>8</sup>。犬井氏の「院本は、B系列（後に京図本系列と改称）の中でも更に末流本文である。或いは、京本を直接の祖本とするものであるのかも知れない。」との犬井氏説を確認したい。

次いで早本について述べる。該本は平成二年六月、白崎祥一氏の解題を付して影印刊行された（早稲田大学蔵資料影印叢書『軍記物語集』早稲田大学出版部）ことにより、その存在を広く世に知られた伝本である。その本文の性格については、上記の白崎氏の解題において「基本的には京図本（小稿に言う京本）と同系本文であること」が確認されており、岩波新古典

大系本の解説も同見解を取る。この点に関し更なる検討を加えるに、京本に比した場合の早本の顕著な特色として白崎氏により掲出された四箇所の欠脱は、院本にもそのまま認められる。このことから、早本は、京図本系列の中では、京本よりも院本に近似する伝本と位置づけられる。事実、早本と院本の間には表記の相違の他は、きわめて微細な字句の異同が認められるに過ぎない。しかも字様も似ていることより、両書は臨模による直接もしくはそれに準じる書承関係にあると考えてよいだろう。その場合、両書の先後関係は院本先出と判断される。そう判断される根拠を以下に記すと、早本は院本に比して平仮名表記の顕著な本文を持つ。すなわち、院本において振り仮名付き漢字表記の箇所が、早本では平仮名表記になっている場合が多い。今、そうした現象の中から留意すべき事例を拾う。

(1) いまハリきうくはいとのなミをしのぎて淮南ふほうあ  
いしやうのこゑをますくわうぜんにあらし松をはらひて

(99)

讃岐にある崇徳院が弟の覚性に宛てたとする書状の一節を早本を以て示した。傍線を付した「くはいと」「くわうぜんに」が、院本では各々「外都」「光然に」とある。

前者の場合、京本が院本と同様に「外都」とする以外は系統内の他本すべて平仮名表記である。また後者も、京本がやはり院本と同様「光然に」とする以外は、他本「しるかる（然）に」「くわうぜんに」と記す。該文は金刀本系

統にも存在するが、これには「くはいと」に「懐土」の漢字が宛てられており、また「くわうぜんに」に相当する字句はない。当該部を、院本・早本の先後関係判定の視点から検討すると、早本先出と仮定した場合、最初は早本の如く「くはいと」「くわうぜんに」と平仮名表記だったものに、院本が「外都」「光然に」の漢字を宛て、それが偶然に京本とも一致したということになる。しかし、「外都」についてはともかく、「光然に」なる宛字が遇合する可能性はきわめて低い。「くわうぜんに」は意味不明の語であり、それが生み出された原因は、行間に記された校合本文が本行本文化したためと推測されるのだが、このことによっても、早本先行の考えは成り立ちがたい。院本に見られる如き「外都」「光然に」を、早本が書写するにあたって、振り仮名のみを採って「くはいと」「くわうぜんに」と平仮名表記したとみるのが自然な理解だろう。右の事実によつて、院本・早本の関係は院本先行とみなしてよいと思うが、確度を増すために同種の事例をいくつか加えておきたい。

(2) せんぐはんのいつミ(16)

院本「千願の泉」、京本「千願の泉」、同系統の他本も漢字表記の伝本は「千願の泉」とする。他系統では、半井本・鎌倉本・流布本「千巻の泉」「十巻の泉」、金刀本系統については管見に入った伝本の限りでは漢字表記の場合は「先館の泉」。杉原本は「千願のいつミ」(願

に「タチイ」と傍書)。諸注釈書の記す如く、正しくは「千貫の泉」か。この場合も、早本の「せんぐはん」から院本の「千願」が生じ、その宛字がたまたま京本等の記す「千願」に一致したとは考えにくく、院本の「千願の泉」から早本の「せんぐはんのいつミ」への道筋を推定する方が理に叶う。

(3) さがみあじやりせうぞん(16)

院本は、傍線部「證尊」とする。同系統の他本も漢字表記の伝本は「證尊」(根本—澄尊)とし、院本と同じ。他系統の場合、半井本・鎌倉本並びに管見に入った限りの金刀本系統伝本で漢字表記のものは「勝尊」とする(ただし、蓬本は「乗尊」(「乗」に「澄イ」と傍書)。また、『兵範記』も「勝尊」。この場合も前項等と同じ理由をもって院本「證尊」から早本「せうぞん」へと理解すべきだろう。

(4) てんしやくくもんしやを定をき給ひしより(28)

同じく早本の本文だが、傍線部、院本は「天社国門社」、京本は「天社国門社」とする。同系統の他本や他系統の記す「あまつやしろくにつやしろ」「天津社国津社」が本来の姿だろう(斑本は「あつやちやしろ」と誤記)。院本・京本に見える「門」は、変体仮名の「つ」を漢字と見誤ったものと解される。この場合、早本の「てんしやくくもんしや」から、院本の「天社国門社」が生じたとは考え難く、天社国門社(京本)↓天社国門社(院本)

↓てんしやくくもんしや(早本)の流れを想定するのが自然だろう。

(5) けんげむ(ん)(62~63)

人名であるが、院本は、「顕玄」とする。同系統の他本も漢字表記の場合は「顕玄」で統一している。他系統(金刀本については、管見に入った限りの伝本)では、漢字表記の場合すべて「玄顯」とある。これが正しく、「顕玄」は、京凶本系統に特有の宛字である。従って、この場合もやはり、早本「けんげむ」↓院本「顕玄」の流れを想定することは困難である。

如上、院本・早本の表記の相違に着目するに、院本から早本への流れを想定することが自然な理解と思われる。

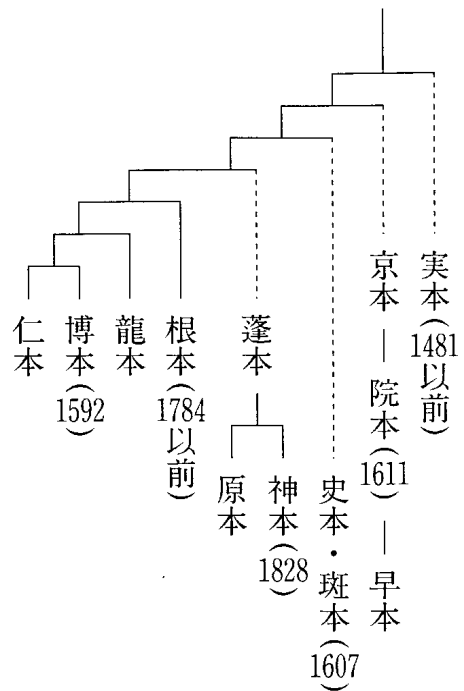
以上、京凶本系列三本は、直接の書承関係で結ばれるか否かはなお定かではないものの、その先後については左のごとき関係で捉えてよからう。

京本 ————— 院本 ————— 早本

七

これまでの考察の結果を総合すると、京凶本系統諸本の相互関係は左の如くなる。





実本については言及しなかったが、断簡ながら、現在の系列に分岐する以前の本文を伝えておくことをかっけて述べた。<sup>⑩</sup>

奥書その他の根拠により書写年次が明確な伝本については、その年次を西暦年で（ ）内に示した。書写年次の不明な伝本も含めて、実本以外の恐らくすべての伝本が中世最末期近世初頭以降の書写にかかるものと思われる。完本としては、天正二十年（一五九二）五月二十七日書写の奥書を持つ博本が最も古いことになるが、考察の結果、該本はかなり末流の本文を伝えていることが明らかとなった。該系統は十六世紀末の段階では相当に本文のくずれが進んでいたと言える。文明十三年（一四八一）六月二十七日からさほど溯らない時点で三条西実隆によって書写され、系統中では卓越して純良な本文を伝えると目される実本に、既に欠脱並びに校合かと思われる書き入れが見出されることをも考慮に入れれば、該系統の普及・定着期は十五世紀前・中期の頃だったろうか。該

系統中では根本がより信頼すべき本文を伝えていることを犬井氏が説かれて以降、それはほぼ定着の観があるが、該本にもいくほどのかの固有本文が見出される。<sup>⑪</sup>しかも、それらが付加されたのは、龍・仁・博二本の共通祖本と、根本（の祖本）が分岐して以降、現在の根本に至る過程でのことだったと考えられる。根本の書写年代は「銀郷安斎ノ藏本ヲ乞需テ書写シ」た由の奥書より、それが伊勢貞丈（天明四年（一七八四）七十歳没）の生存期、すなわち、十八世紀中・後期あたりとなり、写本としてはごく新しいものである。後付の要素が見出されることは当然と思われる。

#### 注

- (1) 「京図本系統『保元物語』本文考——二系列分類とその本文の吟味——(上)(中)(下)」(『言語と文芸』昭43・九、十一、44・三)及び「宝徳本系統『保元物語』本文考——四系列細分と為朝説話追加の問題——」(『和歌と中世文学』東京教育大学中世文学談話会 昭52・三)
- (2) 仁和寺藏本・原水藏本については、原水「『保元物語』写本目録稿」(徳島大学総合科学部「言語文化研究」平11・二)、龍谷大学図書館蔵本については原水「管見『保元物語』の伝本二、三」(『徳島大学総合科学部創立記念論文集』昭62・三)、早稲田大学図書館蔵本型本については「<sup>⑫</sup>早稲田大学蔵資料影印叢書『軍記物語集』」(早稲田大学出版部 平2・六)の白崎祥一氏

- 解題、学習院大学蔵実隆筆忠光卿記紙背断簡については原水「学習院大学蔵『忠光卿記』紙背『保元物語』の本文」(『名古屋大学国語国文学』昭63・十二)
- (3) 同筆の『平治物語』(二卷二冊)と揃え。外題は表紙左原題簽に「保元物語 上(下)」。巻首題は「保元物語 上(下)」。背に「保元物語 上(下)」(別筆)。青墨色無地表面紙。二卷二冊。墨付紙数上巻五六丁、下巻四八丁。袋綴。本文料紙は楮紙。寸法二八・〇×二二・四釐。一面一行(時に一〇行)。平仮名交じり。下巻末に「天正廿年五月廿七日写之」の奥書。表紙右肩に、「恩賜京都博物館蔵書」の印記と台帳番号第九七四号を記した赤色紙、右下に「和文/B3/10-1(2)」のラベルを貼付。見返しに「和文/B3/10-1(2)」の印、「京都国立博物館/図書印」の朱方印、「昭和27年4月1日/京都国立博物館図書/第<sup>2880</sup>9395(9396)号」との楕円青スタンプ。墨付第一丁表に「華山/蔵書/之印」の朱方印(上から抹消印)、「帝国京/都博物/館之印」の朱方印がある。
- (4) 略校異に示すように斑本にも同様の欠脱が認められるが、位置が幾分ずれていることより、遇合と見るべきだろう。
- (5) 注(1)の「言語と文芸」所収論文
- (6) 基盛・宗盛の問題については、日下力氏『平治物

語の成立と展開』後篇第二章第二節「『平家物語』における清盛の次男基盛の消去をめぐる」(汲古書院平9・六)に考察がある。

(7) 「京都大学  
国史研究室蔵『保元物語』の本文—京図本系統本文考補遺—」(『軍記と語り物』6 昭43・十二)

(8) ただ、京図本には一箇所院本に比して明白な欠脱が存在している。それは、大庭景能負傷の場面「兄かよろひも重代なり我かハラより大庭平太をかいおうて」の部分であり、一見して欠脱が思われる。院本の場合、相当部「あにかよろひも重代也わかきたるもさうてんのよろひなり大庭平太をかいおうて」とあつて意味が良く通じる。しかし、この点については、恐らく院本が京本の不備を「金刀本系統の如き本文によって修正を加えた」ことが犬井氏により説かれている。

(9) 詳しくは和泉書院本の補注下63を参照されたい。

(10) 「学習院大学蔵『忠光卿記』紙背『保元物語』の本文」(『名古屋大学国語国文学』昭63・十二)

(11) 拙稿「管見『保元物語』の伝本二、三」(『徳島大学総合科学部創立記念論文集』昭62・三)

#### (付記)

京都国立博物館蔵本の閲覧については、長坂成行氏の御仲介を得て下坂守氏の御高配に与った。深謝申し上げる。